



梅花歌卅二首 并序

天平二年正月十三日 萃于帥老之宅申宴會也

于時初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以曙嶺移雲

松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶 空歸故鴈

於是蓋天坐地 促膝飛觴

忘言一室之裏 開衿煙霞之外

淡然自放 快然自足

若非翰苑何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠



梅花の歌 三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に、帥の老の宅に萃まりて、宴會を開く。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和き、

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封めらえて林に迷ふ。

庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

ここに天を蓋とし、地を座るとし、膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、襟を煙霞の外に開く。

淡然と自ら放にし、快然と自ら足る。

若し翰苑にあらずは、何を以ちてか情をのべむ。

詩に落梅の篇を紀す。古と今とそれ何そ異ならむ。

宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

天平二年(808)年正月、大宰帥(大宰府の長官)であった大伴旅人の館で新年会が開かれた。参加者は四つのグループに分かれ、其々が梅の花を題として八首ずつ、三十二首の歌に詠んだ。万葉集にある、その宴を紀した序文から採ったものが、新元号「令和」の出典である。

【現代語訳】

天平二年正月十三日に、大宰府長官宅に集まって、新年会を開いた。

丁度月が改まり、新年の素晴らしい月が出ていて、穏やかで風も和らいでいる。

梅は、女性が鏡を前にして化粧する白粉のように白く花卉を開き、

蘭は、雅な女性の飾り物から香ってくるような白い匂いを漂わせている。

そればかりか、夜明けの嶺に雲が移り、松林は薄衣のような雲を纏って

空が傾くように見える。

夕方になれば山の洞穴には霧が立ち込め、鳥はその薄い織物に閉じこめられて林の中を右往左往している。

庭には羽化したばかりの蝶が舞い、空には越冬した雁が故郷に帰ってゆく。

ここに天を蓋物とし、地を敷物として、親しく膝を寄せて盃を空けて酒を酌み交わそう。

何と言ったかも忘れ、整えていた襟さえも外気の雲と霧に向って開けよう。

わだかまりなく自分の心を解き放ち、気持ちよく自らの満足としよう。

文筆でなければ、何を以って心情を述べることが出来ようか。さあ、散って行く梅の花を詩に残そう。(中国の『詩経』に落梅散りゆく梅の花を詠んだ歌が多ように)

落梅を詩に詠むことは昔も今も変わるものか。

どうかこの園の梅を詩に詠んで、ひとつ短歌を詠んでほしいものだ。

令和元年 四月三日

大臣 正比呂 拙訳

令和